

パウロは紆余曲折を経て、ローマに着きました。エルサレムにおける逮捕、拘留、そして未決囚として護送されて、船でローマに向かい、嵐や暴風に悩まされ、漂流し、最後には船が難破するということもあり、まさに大変な思いをしてようやくローマの地に辿り着いたのでした。

ローマはローマ帝国の首都であり、当時の世界の最も巨大な都市でした。異邦人伝道を目指すパウロにとってローマで福音伝道することは当然深い願いの一つであったはずで、そのローマにようやく着いた。それならこの 28 章にローマでの伝道の様子が詳しく語られているか、というところを決してそうではない。

15 節を読むと、「兄弟たちがわたしたちのことを聞き伝えて迎えに来てくれた。」とあります。この兄弟たちというのはおそらく、ローマにあるキリスト教会の信者たちのことです。ローマにはすでにキリスト教会があった。パウロがローマの信徒への手紙を書いたのは、もうずいぶん前のこと。したがって、迎えに来た兄弟たちというのは、ローマ教会の信者たちがパウロを歓迎して迎えた、ということに他ならないのです。

にもかかわらずこの 28 章にはローマ教会との交流や、ローマ教会での伝道の様子が何も記されていない。さらに驚くべきは、そもそもこのローマに皇帝に上訴して裁判を受けるためにやって来たのに、その結果についてもエルサレムやカイサリアではあれほど詳しくその一部始終が記されていたのに、ここローマでの裁判は何も報告されていない。

ローマの信徒への手紙によればパウロはローマで伝道したのちには、イスパニア・スペインにも行き、まさに地の果てまで伝道したいとの希望を持っていたのですが、そのことにも全く触れていない。パウロはこの後どうなったのか、何も手掛かりを与えてくれない。どうしてなのか。

しかしそれらの疑問は少し後で考えるとして、この 28 章の 17 節以下で語られていることに目を向けるとパウロはまず、ローマでおもだったユダヤ人たちを招き、なぜ自分が未決囚として、鎖につながれたままローマに来たのか、を弁明するのです。このユダヤ人とは、キリスト教会に属する者たちではなく、文字通りユダヤ教の主だった人々だった。パウロは「イスラエルが希望していることのためにわたしはこのように鎖につながれているの

です。」と言うのですが、「イスラエルが希望していること」、それは救い主待望ということ。救い主がこの世においでくださり、この世を、人間を救う、その待望です。ユダヤ教徒はまだ救い主は来ていないとし、キリスト教徒は到来した、と受けとめている。ここがまさに両者を分かち決定的分岐点なのですが、パウロはイエス・キリストという救い主を神はお与えになったのだ、という点で、ユダヤ教の人々により鎖につながれている、そうローマのユダヤ人に説明したのです。ところが、ローマにいたユダヤ人たちの反応は、エルサレムにいるユダヤ人たちとは相当の温度差があり、風評程度にしか聞き及んでいなかった。それでローマのユダヤ人たちは、あなたの考えていることを直接聞きたいと申し出るほど冷静なものでした。パウロはそれに応じて自分の宿舎に彼らを招き、朝から晩まで、キリストの福音を宣べ伝えました。パウロの話聞き、受け入れた者がいたが、信じない者もいたことが記されています。

ここでの素朴な疑問は、なぜパウロはローマに来てまで、ユダヤ人なのか、という率直な疑問です。もうローマに来たのだから、ユダヤ人に関わり合うことなく、異邦人伝道に邁進したらいいのに、なぜここまで来てユダヤ人なのか。

使徒言行録の最終章には多くの人が期待するような物語の顛末というような話はほぼなく、違うことが書かれています。その場合、当然わたしたちの方が視点を移動する必要があるのだと思います。つまり、著者ルカは最後に何を語りたかったのか、わたしの期待ではなく、ルカが語ろうとしていることに虚心に聞く、ということです。そこではっきりしてくることの一つは、パウロのユダヤ人に対する、ユダヤ教徒に対する深い思いです。もちろん、それはこれまでも何度も聞いてきたことです。

今朝は、もう少し違う視点からお話したいと思います。福沢諭吉の言葉で「一身にして二生（にせい）を経（ふ）るが如く」という有名な言葉があります。江戸幕末の時代と、明治というあまりに激変した社会を生きた福沢の言葉で一つのからだで、二つの生を生きたということでしょうが、パウロはまさに一身にして、熱心なユダヤ教徒としての人生と、イエス・キリストの僕としての人生、キリスト者としての人生の二生（にせい）を生きただけです。

確かにはたから見れば、ユダヤ教からキリスト教というぐあいに全く違う二生のようにも見えるのですが、パウロは福沢とは違い、一身にして二生を

経ると思っていたかどうかはわからない。確かにユダヤ教からキリスト教という大きな変化はあったのです。しかし、パウロの中ではユダヤ教とキリスト教というものはしっかりとつながっていた。別々に離れたものではない。ユダヤ教で語られていること、つまり旧約聖書で語られる神の愛、信実、それはイエス・キリストにおいてまこと成就した、とパウロは受け取っていた。つまり神の信実において、固くつながっている。だからこそ、ユダヤの人々に、ユダヤ教の人々に救い主イエス・キリストを受け入れてほしいとパウロは心から願っていたのだと思います。

この時点では、まだ新約聖書というものはありませんでした。もちろんパウロは自分が書いた手紙が「新約聖書」と呼ばれる本になるなど、想像もできなかった。だが、パウロという人が、はっきりと描いていたのは、旧約聖書と初代教会が福音と語っていることとは、一つとなる、ということだったのではないか。それは二つは同じ、という意味ではなく、旧約の完成としての福音、という意味で一つ。パウロはそのことを誰より深く、この時受けとめていた。

彼はエルサレム教会を大切にした人です。そのために危険を冒してエルサレムに献金を届けに行き、実際そのために逮捕拘留されたのです。しかし彼はエルサレムを聖地扱いし、エルサレムでなければだめとかユダヤ人だけが救われる、と考えたわけではありません。まったく逆に、世界中のどこであれ、どこの人であれ、キリストの福音によって救われる、ということを説いたのはパウロです。しかし同時に、パウロは、神がイスラエルの歴史の中で、具体的に働かれ、アブラハムを選び、モーセを立て、神の器として用いて、神の恵みを表されたこと、その神の働きに感謝し、その恵みを信じて受けてきたのです。パウロはユダヤ人を彼ら彼女たちだけが選ばれた人などとは微塵も思わない。だが、ユダヤ人において働いた神の恵みを忘れることなどできない。そしてその神の恵みがイエス・キリストへと結実し、終末へと向かうということをパウロは知っていた。だからパウロの行動には、どんな攻撃にさらされても、ユダヤ人に対する敬意があふれていた。パウロは異邦人伝道を自分の使命とした。それは異邦人に伝道することで、ユダヤ人に真実目覚めてほしい、という祈りのこもったものだった。

翻って、パウロの最大の使命は何だったのだろうか。それはどこまでもどこまでも伝道の前線を拡張していくことだったのだろうか。アンティオキアからガラテヤ、エフェソ、コリント、そしてローマ、エスパニアと。確か

にその願いと祈りを持っていたことは間違いないし、事実彼は実行した。その行動力は驚くべきもの。しかし彼の使命はただ伝道の前線を拡大していくにあったのではなく、その根底で示されていたことがあったのではないか。それは神から与えられた福音をその深さ高さ豊かさに即して、しっかりと聞き取り、受けて、それを宣べ伝える、という一事です。神の福音に聞き、受けとめるとは、イエス・キリストの十字架と復活の福音をいよいよ豊かに受け、旧約聖書をキリストの光の中で読みぬく、ということでした。伝道の前線が拡大すること、それはもとより大事なことです。しかし、この自分に神が示された福音に聞くこと、これこそ最も大事なこと、そしてどこであれ、今ある場所で、遣わされた場所でこの福音を宣べ伝えること、これが、パウロに示された最も深い使命だった。

使徒言行録の終わり方は、不思議な終わり方のようにも見えます。パウロは福音に聞こうとしない人々に対して預言者イザヤの言葉を引用して、耳で聞くことなく、心で理解せず、立ち帰らない、と言う。それはすなわち、福音に聞いてほしい、神に立ち帰ってほしい、という祈り願いなのでしょう。最後の30節、31節にはこう書かれています。「パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問するものはだれかれとなく歓迎し、まったく自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。」パウロの裁判のことも、パウロのスペイン伝道のこともルカは一切記さないで、ただ、パウロが自由に大胆に、福音を宣べ伝え、キリストについて語り続けた、と記して使徒言行録を終えている、それは、読者であるわたしたちがパウロの使命を何らか受け継いでいくことこそ、肝心なことなのであり、教会に連なる一人一人が神から与えられているもの、託されていることを継承してほしい、と思いが、この終わり方には、滲み出ているのです。